

コロナ禍の困窮者支援の必要性と課題

特定非営利活動法人さんきゅうハウス
理事長 大沢 豊

・コロナ禍で困窮者続出

国内で新型コロナウイルス感染が顕著になり始めた2020年春頃から生活に困窮し、相談の連絡が多くなり始めました。社会で異常な変化が起きていると感じて、同年5月から立川市内2カ所でお弁当の無料配布を始めました。家がない人たちが来ると思っていたら、そうした人たちよりも近所のアパートなどに住んでいる人や普通に生活してきた人たちがお弁当を受け取りに来ました。コロナ禍で多くの人の生活が困窮に陥っていることが明らかになって来ました。

・ここ10年ほどの支援

これまで支援してきた人々の中で高齢の人たちの中にはアパートに落ち着いてもやることなく、他の人との交流もなく、外出もせず体力が衰えフレイル状態になる人もいました。また、少額でもお金があるために飲酒を始め、それがやめられなくなり日常生活が正常に送れなくなる人もいます。さらには認知症の症状が現れ、介護保険を適用しヘルパーさんが入るようになってそれが進行し、施設への入所となってしまう人もいます。

今まで持ててなかった銀行のカードを作れても自分でATMの操作が出来ず、生保のお金の引き出しを友人に操作してもらって搾取され一部しか受け取れない人や、金銭管理そのものができない人もいます。こうした高齢の人たちの金銭管理を含め支援しなくてはならないことは増えて来ました。



・経済的な問題だけではない対人支援の困難

昨年から続くコロナ禍での支援を必要とする様々な状況の人たちには、支援の方法も多岐に

渡りました。元々ギリギリの経済状態で生活を維持していたが不況の中で生活基盤が壊れ、住まいを失ったという人が多くなりました。年配者から若者まで頼れる仲間、友人も少ないという人々でした。

また、最近のケースではさらに複雑な事情を抱えた人たちが増えています。子供の頃に不安定な、あるいは経済的にも愛情の面でも厳しい家庭状況で育った人たちや、児童養護施設出身もいて、私たちとの信頼関係を作るのが困難な人もいます。支援を受けて住まいを確保し、生活保護に繋いでも経済的なものだけではないメンタルなものも含む重層的な課題や、何らかのハンディを抱えている可能性のある人がいて、自らの窮状を外部に伝えることが出来ずに引きこもったり、孤立してしまったりする人も多くなって来ました。

貧困問題というより、何らかのハンディを抱えていて働き続けられない、生活が安定しないという状況になってしまっているという気がします。私たちは精神障害に関するノウハウを持っているものも少なく、手探りで支援している状態です。現在の福祉政策では対応出来ない「福祉の谷間」に置かれている状況でしょう。

・支援者側の高齢化と財政基盤、

それでは私たちのような財政基盤の無いNPOがこれ以上何をできるのかということが問題になって来ます。私たちは活動費の多くをカンパや団体からの助成などで賄っていますが、人件費はほとんど支払われておらず、関わるメンバーはほぼボランティアで支援をしています。さらにその支援者の高齢化もあって、若い人たちに活動を受け渡し出来るかも課題です。

困窮者が抱える精神的なハンディの支援は現在、行政課題として取り組めていません。生活保護のケースワーカーの仕事かもしれませんが現状のワーカー数では無理でしょう。こうした人たちへの丁寧な支援が出来る仕組みを行政課題として作っていかねばならないと思います。